

チャガタイ語の読音に関するいくつかの事例

菅原 睦 (すがはら むつみ)

東京外国語大学

15 世紀ティムール朝の宮廷文化を背景として確立したと考えられるチャガタイ語・チャガタイ文学は、代表的な文人であるミール・アリーシール・ナヴァーイー Mir ‘Alīšēr Nawā’ī (1441-1501) の作品などを通じて、東西トルキスタンをはじめとする中央ユーラシアの広い範囲に普及したとされる。このようなチャガタイ語とその文学作品が、各地でどのように受容され、それに伴って古典文学の言語としてのチャガタイ語が各地のチュルク諸語の発展にどのような影響を及ぼしたかという問題は¹、チュルク語史の研究にとってきわめて重要であるにもかかわらず、これまで十分に検討されてはいない。ここでは「古典語」としてのチャガタイ語の読音、すなわち各地での読まれ方に関する興味深い事例をいくつか紹介したい。

1

まず、ナヴァーイーの物語詩『ファルハードとシーリーン』 *Farhād u Šīrīn* の一節を²、ウズベキスタンでラテン文字を用いて出版されたテキストと、中国の新疆ウイグル自治区で改良型アラビア文字を用いて出版されたテキストにより示す（後者は引用者の翻字による）。

ウズベク版 (Alisher Navoiy, *Farhod va Shirin. Nasriy bayoni bilan. Porso Shamsiyev tuzgan ilmiy-tanqidiy matn asosida dostonni nashrga tayyorlovchi: Vahob Rahmonov. Toshkent: G‘afur G‘ulom Nomidagi Nashriyot-matbaa Ijodiy Uyi 2006, p. 48).*

*Bu zebo bazmning alhonnamoyi,
Bu yanglig‘ bo‘ldi so‘z dastonsaroyi:
Ki, chun Xoqong‘a Tengri berdi farzand,
Bo‘lub ul hadya birla shodu xursand.
Jamoli birla ko‘nglin aylabon xush,
Otin qo‘ymoq sori bo‘ldi raqamkash.
Jamolidin ko‘rungach farri shohi,
Bu fardin yorudi mah to ba mohi.³*

¹ そもそもこの言語が各地でどういう名称で呼ばれてきたか（呼ばれているか）、という問題も検討の必要があるが、ここでは立ち入らない。cf. Bodrogligeti (1993).

² 第 13 章 1-4.

³ 「この美しい宴の歌詠みは、次のように物語を奏でた：ハーカーンに神が子供を授けると、彼はその贈り物に満足し、その美しさに心を踊らせ、名を付けるべく思案した。その美しさから

ウイグル版 (Älišir Nāwayi, *Fārhad - Širin*. nāširgā täyyarlıguči: Rāhmitulla Jari. Šinjañ Yaşlar-Ösmürlär Nāşriyatı⁴ 1991, pp. 111-112).

*bu ziba bāzmniñ ālhannāmayi,
bu yānliğ boldi söz dastan sārāyi.
ču xaqangä täñri bārdi färzänd,
bolub ol hädyä birlä šadu xursänd.
jämali birlä köñlin äylāban xāš,
atin qoymaq sari boldi rāqām kāš.
jämälidin körüngäč färri šahi,
bu färdin yarudi mähtabmahi.*

両者はそれぞれ現行の正書法で用いられているラテン文字、改良型アラビア文字の字母に手を加えることなくそのまま使用している。従ってそれぞれのテキストはウズベク語、ウイグル語と同一の音素目録を想定したものと判断される⁵。その一方で、次のような興味深い相違が見られることから、現代語の対応する形式をすべてそのまま採用しているわけでもないことがわかる。

ウズベク版での表記

Tengri 「神」
bo'lub (動詞 *bo'l-* 「ある, なる」の副動詞形)
sori 「の方へ」
ko'run- 「見える」
yoru- 「輝く」

ウズベク語

Tangri
bo'lib
sari
ko'rin-
yor-

ウイグル版での表記

hädyä 「贈り物」
xursänd 「嬉しい」
ati (*at* 「名前」 + 3 人称所有接尾辞)⁶
yaru- 「輝く」

ウイグル語

hädiyä
xursän
eti
yoru-

ウズベク版の場合、テキスト中の形式とウズベク語形式との隔たりが比較的

王者の光輝が姿を現すと、この光輝により世界はあまねく照らされた。」

⁴ 中国語表記は那瓦依『帕尔哈提-希琳』选编者：热·贾力，新疆青少年出版社。

⁵ このような形で刊行されるものが多い中、2011年に新疆ウイグル自治区で出版されたナヴァーイーの4つの詩集のテキストは、原資料のアラビア文字綴り、現代ウイグル語の字母による転写、独自のラテン文字転写、の3種類で刊行されており注目される。

⁶ 引用テキストではその対格形が用いられている。

小さいのに対し⁷，ウイグル版では，現代語に特徴的な母音の逆行同化 (*eti* < *ati*; *yoru* < *yaru*-) や高母音化⁸が現れないため，両者の違いがより目につきやすくなっている。

ここで注意しなければならないのは，このような現代語との相違点が，実際にテキストを音として読み上げる場合にどこまで反映されるのかという点である。もしテキストの表記に忠実に発音すれば，現代語とは異なる一種の「古典的発音」ということになるのに対し，表記はあくまで慣習的なものとして，ちょうどわれわれが歴史的仮名遣いで書かれた日本語の古典文を読むときのように，対応する現代音で読むことも十分に考えられる。その選択の実態については，芸能・学術から個人的な朗読や暗唱といったさまざまな場面ごとに詳しく検証される必要がある。ここでは一例として，新疆ウイグル自治区で刊行された，ナヴァーイーの散文作品『心に愛されるもの』*Maḥbūb al-qulūb*⁹朗読の音源 (Älišir Nāwayi, *Māhbubulqulub. Qälblär Söyğüni* (Awazlıq Nāšri). Täyyarlıguçi: Abdurehim Toxti. Millätlär Ün-Sin Nāšriyatı¹⁰ 2015) を紹介したい。この音源では，テキストの散文部分は現代ウイグル語訳によって，韻文部分は原文と現代語訳とで朗読されている。原文の朗読では，上述の転写形式と同様の「古典的発音」が実際に用いられていることが確認される。

朗読¹¹

ariq 「水路」

baši (*baš* 「頭」 + 3 人称所有接尾辞)

emäs 「～でない」

ol 「彼 (女)，それ」

örgän- 「学ぶ」

ウイグル語

eriq

beši

ämäs

u

örgän-, ügän-

⁷ 参考として 1940 年に刊行されたラテン文字表記テキスト (Ölişer Navaij, *Farhad va Şirin. Basmaga tajjarlavci Qıafur Qıulam. Taşkent: OzSSR Davlat Ilmij-texnik va Sotsial-ekonomik AdaBijatlar Naşriyatı* 1940, p. 88) での対応箇所をあげておく：

Bu zeBa Bəzmni ilhan nəməji,
Bu jənlıq Boldi soz dəstan sərəji:
Ki cun xaqanoje tənri Berdi fərzənd
Bolub ul hədjə Birlə şadu xursənd
Çeməli Birlə koqlin əjləBan xuş,
Atin qojmaq sari Boldi rəqəmkəş,
Çəmalidin korungəc fərri şahı,
Bu fərdin jarudi məh ta Bəmahı.

⁸ 例として *qoymadi* (p. 112) - Uyg. *qoymidi*; *atasi* (p. 207) - Uyg. *atisi*; *közləridin* (p. 453) - Uyg. *közliridin* など。

⁹ この作品については久保 (2008) を参照。

¹⁰ 中国語表記は艾里希爾・納瓦依『《众心所愛》誦讀版』，阿布都熱依木整理，民族音像出版社。

¹¹ 以下では便宜上，ウイグル語表記と同じ翻字を用いて表記してある。

tābib¹² 「医師」

yaramas (yara- 「役立つ」 + 否定アオリスト)

tewip, tiwip

yarimas

一方でときおり現代語の発音の特徴が混ざっているのも聴き取れる。

朗読

ämäs 「～でない」

birawğa (「一人」 + 与格接尾辞)

elip (al- 「取る」 の副動詞形)

pida 「犠牲」

uniñ (ol 「彼(女)・それ」 の所有格)

yošurun 「隠れて」

原文¹³

ermäs

birāwgä

alip

fida

aniñ

yašurun¹⁴

ウイグル語

ämäs

birawğa

elip

pida

uniñ

yošurun

このような、同時代的な発音の混入は、伝統的な（つまり「改良型」でない）アラビア文字表記テキストの音読においてはより起こりやすかったと推定される。その一方で「古典的発音」の存在は、伝統的な文章語と口頭の言語との間のずれに対する自覚を前提とするものであり、それはかつてのアラビア文字表記の多音性を排した新しい正書法が確立し、さらにその正書法の文字要素を用いてチャガタイ語テキストを転写することが行われるようになってから、一種の綴り字発音として現れた可能性が高い。今後、過去の音源を含むさまざまなデータの分析を通じて、そのプロセスが解明されることが期待される。

2

ウズベキスタンや新疆ウイグル自治区と並んで、トルコでもチャガタイ語作品の転写テキストの出版が盛んである¹⁵。トルコではさまざまな転写方式が用いられているが、一例として、トルコ言語協会による「アリーシール・ナヴァーイー全集」Alî-şîr Nevâyî Külliyyâtı の第7巻として刊行された『ファルハードとシーリーン』から、上記の引用に対応する箇所を示す。

トルコ版 (Alî-Şîr Nevâyî, *Ferhâd ü Şîrîn. İnceleme - Metin.* (haz.) Gönül Alpay-Tekin. Ankara: Türk Dil Kurumu 1994, p. 133)

¹² エザーフェを伴う *tābibi* の形で読まれているため、語末子音の単独での発音は不明である。

¹³ テキストは Ālîşîr Nāwayî, *Māhbubulqulub. Nāşrā tāyyarlıguçi: Ablimit Āhāt. Şinjan Güzāl Sān'āt-Foto Sūrāt Nāşriyati, Şinjan Elektiron Ün-Sin Nāşriyati* 2011 (艾利希爾・納瓦依『心有独鍾』, 阿卜力米提・艾海提整理。新疆美術摄影出版社・新疆电子音像出版社) を使用した。ただし朗読音源との間にいくつかの語句の違いがある。

¹⁴ 註11のテキストでは対応する部分が欠けている。*yašurun* は久保 (2008:276) によった。

¹⁵ ただしテキストの翻訳や、内容に関する注釈が添えられていることはまれである。

Bu zībā bezmning elhān-nümāyī
Bu yanglıg boldı söz destān-serāyī
Ki çün hākānga Tīngri birdi ferzend
Bolup ol hedye birle şād u horsend
Cemāli birle könglin eyleben h'aş
Atın koymak sarı boldı raqam-keş
Cemālidin körüngeç ferr-ı şāhī
Bu ferdin yarudı meh tā be-māhī

ウズベク版やウイグル版の場合と異なり、トルコ語の正書法では用いられない *ğ, h, ħ, k, ng, ş* などの特殊文字を必要に応じて用い、また借用語の長母音を短母音と区別して示すなど¹⁶、より学術的な転写テキストとしての性格が強い。これは言うまでもなく、トルコにおけるチャガタイ語テキストの出版はそもそも学術的な目的のものに限られており¹⁷、ウイグルやウズベクにおけるような自らの古典文学の本文を提供するという位置づけではないからである。

チュルク語要素に関して言えば、*Tīngri, birdi* (cf. ウズベク版 *Tengri, berdi*; ウイグル版 *tāngri, bārdi*) に見られる第1音節の母音 *i* が特徴的である。これはいわゆる「狭い *e*」の認定の問題と関わっている。

古代チュルク語においては、第1音節で前舌平唇母音に *e/è/i* の3種の区別があったと考えられるが¹⁸、チャガタイ語においては、これらに対応する母音が第1音節でいずれもアラビア文字 *yā* で表記される傾向がある。もしチャガタイ語の母音体系としてトルコ語と同じ8母音 (*e/i/ö/ü/a/ı/o/u*) 体系を想定するならば、これらはすべて母音 *i* として転写されることになる¹⁹。ヨーロッパのチュルク学でも、例えば古代チュルク語テキストのエディションにおいて、こんにち *è* と考えられている母音を文字 *i* で転写する方式がかつて用いられていたが²⁰、*Tīngri, birdi* のような表記はこれに倣ったものと考えられる。原資料のアラビア文字表記との対応という点ではもちろん問題はないものの、第1音節において元の *e:è:i* の対立が消失し *i* のみが現れるというのは、チュルク語の母音体系としてかなり不自然である²¹。古代チュルク語の研究においても上記の

¹⁶ ただし古典ペルシア語の長母音 *ī* と *ē*, *ū* と *ō* の区別を転写で示す習慣はないように見える。

¹⁷ もちろん学術的な出版を謳っているからといって、そうでないものよりも信頼できる本文を提供しているとは限らない。

¹⁸ それぞれ *ä/e/i* として転写されることが多い。なお母音の長さの違いはここで考慮しない。

¹⁹ 母音 *e* は低母音として文字 *alif* あるいは *hā* で表記されたと考えられる。なお *eyle*-「行う」など一部の語では第1音節の母音 *e* が想定されている。また借用語においても *ferzend*, *hedye* など第1音節にも母音 *e* が立つとされることが多い。

²⁰ 多くの場合母音 *i* と表記上の区別がないことがそのひとつの理由である。古代チュルク語のうち古ウイグル語の転写法については Ayazlı and Ölmez (2011:45-46) を参照。なおチャガタイ語に関しては Eckmann (1959) もこの転写方式を採用している。

²¹ これに対し元の *e:è* の対立はトルコ語で失われているほか、ウズベク語やウイグル語でもそ

方式はもはや主流とは言えない状況であり、現在ではこれに固執する理由は全くないと言ってよい。トルコで新しく出版されたチャガタイ語テキストの中に、この点を改め、古代チュルク語の *e/ë* に対応する母音を *ë* で、同じく *i* に対応する母音を *i* で転写するものが見られるのは歓迎すべきことである。

上述のような方式がトルコでいつから用いられるようになったのかは確認できていない。チャガタイ語作品は、ヨーロッパのチュルク学の影響を受けるずっと以前からトルコで知られていたが²²、実際にどのような音で読まれていたのかを明らかにするのは容易ではない。19世紀末にメフメト・サードック Mehmet Sadık の著わした『チュルク語の基礎』*Üss-i Lisân-ı Türkî* (İstanbul 1313 = 1895/96) という、オスマン語で書かれたチャガタイ語文法書がある。序文中で「我らの父祖の言語であるチャガタイ語」、「オスマンの甘美な調べの言語の根本にして源泉であるチャガタイ語」と述べられているこの書物中に、チャガタイ語の発音に関する特段の記述が見られないことから、少なくともここでは（当時の）トルコ語の母音体系に近い形で読まれることを想定していたと理解するのが自然であろう。ヨーロッパのチュルク学に由来する、上記のトルコ独自のチャガタイ語転写法が、トルコにおける伝統的な読み方であったとは考えにくい。

3.

最後の事例として、18世紀のイランにおける興味深い状況を取り上げる。この時期、アフシャール朝宮廷に仕えたムハンマド・マフディー・ハーン Muḥammad Mahdī Xān によって『サングラーフ』*Sanglāx* と題された大規模なチャガタイ語－ペルシア語辞書が編纂された。編者の古典チャガタイ語の理解に対してはいくつかの疑問点も指摘できるが²³、以下では『サングラーフ』が示す子音の発音に関する情報に、次のようなアゼルバイジャン語と共通する特徴が見られることに注目したい。

A. 接尾辞-*jä* と-*čä* に関して

チャガタイ語のいわゆる等格 (equative) 接尾辞は、古代チュルク語と同じ-*čäl-ča* であったと推定されるのが一般的であるが²⁴、『サングラーフ』の文法の部 [25v23]²⁵には「程度、規模、到達点」(*qadr o andâze o nehâyat*) を表わすこの接尾辞の子音が「アラビア語の *jīm*」(*jim-e 'arabi*) すなわち有声子音 *j* であるという記述が見られる。一方同じ辞書のこの接尾辞の項目では、例語のひとつと

のままの形では保たれていない（いずれも標準語に関して）。

²² cf. Kuru (2013).

²³ 拙稿 (2003) を参照されたい。

²⁴ cf. ウズベク語-*cha* ; ウイグル語-*čä*.

²⁵ 以下『サングラーフ』からの引用は *Sang.* 所収のファクシミリにより葉数・行数を示す。

して *nejä* 「どのように, どんな」 (*čegune*) [203v9] をあげた後, 「ペルシア語の *jīm* (= *č*) で」 (*bâ jim-e 'ajami*) として *nečä* 「いくつ, いかほど」 (*čand tâ; har čand*) [203v9-10] ほかの例をあげている. 同一接尾辞の異形態の分布としては説明困難なこの状況は²⁶, アゼルバイジャン語 *necə* 「どのように, どんな」および *neçə* 「いくつ」²⁷ とよく符合する.

B. 語頭の有声子音 *g*-に関して

一般に想定されているチャガタイ語の音韻体系では, 固有語の初頭に有声子音 *g*-は立たないとされているが, 『サングラーフ』では, 文字 *kāf*²⁸ で始まる項目の約 5 分の 1 が「ペルシア語の *kāf* で」 (*bâ kâf-i 'ajami*) という注記により初頭子音が有声子音 *g*-であることを示している. これらのうち, 借用語であるもの, 西方のチュルク語を指す「ルームのチュルク語」 (*torki-i rumi*) とされているもの, 接尾辞であるものを除いた残りのほとんどが, アゼルバイジャン語でも語頭の *g*-をもつことは注目される.

『サングラーフ』	アゼルバイジャン語
<i>gäwšä</i> -「反芻する」 (<i>nošvâr kardan</i>) [301v1]	<i>gövşə-</i>
<i>gegir-</i> 「げっぶをする」 (<i>aruğ zadan</i>) [315r22]	<i>gəyir-</i>
<i>gejä</i> 「夜」 (<i>šab</i>) [312v8]	<i>gecə</i>
<i>geñäš</i> -「協議する」 (<i>mašvarat kardan</i>) [316r28]	<i>gənaş-</i>
<i>gijik</i> 「かゆみ」 (<i>hekke o xâreš</i>) [312v12]	<i>gicik</i>
<i>giriš</i> 「入口 ; 入ること」 (<i>madxal; doxul</i>) [313v9] ²⁹	<i>giriş</i>
<i>göbäk</i> 「へそ」 (<i>nâf</i>) [302r27]	<i>göbək</i>
<i>göbäläk</i> 「マッシュルーム」 [302r28]	<i>göbələk</i>
<i>gög</i> 「青草, 草地 ; 青色 ; 空」 (<i>sabze o ulang; rang-e kabud; âsmân</i>) [307v19]	<i>göy</i>
<i>gögärt</i> -「育てる, 青草にする ; 青くする」 (<i>ruyânidan va sabze kardan; kabud kardan</i>) [306v19]	<i>göyärt-</i>
<i>gömür</i> -「かじる」 (<i>jâyidan</i>) [309r18]	<i>gəmir-</i>
<i>göz</i> 「目」 (<i>čašm</i>) [306r29]	<i>göz</i>
<i>gözgü</i> 「鏡」 (<i>âyine</i>) [306v5]	<i>güzgü</i>
<i>gün</i> 「太陽 ; 日」 (<i>âftâb; ruz</i>) [310r4]	<i>gün</i>
<i>günäy</i> 「太陽に向いた方角」 (<i>samt-e âftâb-ru</i>) [310r9]	<i>günəy</i>

²⁶ 『サングラーフ』の編者が, 子音 *č* をもつ *-čä/-ča* を接尾辞 *-jä/-ja* のヴァリエントと考えていたかどうかは記述内容からは判然としない.

²⁷ アゼルバイジャン語の正書法では *c* は有声, *ç* は無声の後部歯茎破擦音を表わす.

²⁸ 『サングラーフ』のアラビア文字表記では *g* を表わす文字 *gāf* は用いられていない.

²⁹ 動詞 *kir*-「入る」の項目 [312v17] には発音に関する注記は見られない. cf. Az. *gir*-.

<i>güräş-</i> 「レスリングをする」 (<i>košti gereftan</i>) [304v20]	<i>güləş-</i> (sic)
<i>gürüldä-</i> 「雷が鳴る, ライオンなどが吼える」 (<i>gorridan-e ra 'd o šir o amsâl-e ân</i>) [305r16]	<i>gurulda-</i> (sic) ³⁰
<i>güvân-</i> 「誇る」 (<i>mofâxerat kardan</i>) [310r27]	<i>güvân-</i>

これに対して, 「ペルシア語の *kāf* で」という注記をもたない項目では, 対応するアゼルバイジャン語の語頭子音の有声・無声との間に関連性は見られない。いくつかの例をあげる。

<i>keč-</i> 「過ぎる, 通行する」 (<i>gozâştan va 'obur kardan</i>) [312r13]	<i>keç-</i>
<i>kečä</i> 「フェルト」 (<i>namad</i>) [312v7]	<i>keçə</i>
<i>kel-</i> 「来る」 (<i>âmadan</i>) [315v8]	<i>gəl-</i>
<i>keñäl-</i> 「広がる, 広くなる」 (<i>vaşi 'o farâx šodan</i>) [316v13]	<i>genəl-</i>
<i>kirpik</i> 「まつげ」 (<i>možgân</i>) [313v5]	<i>kirpik</i>
<i>kizlä-</i> 「隠す」 (<i>penhân kardan</i>) [313v27]	<i>gizlə-</i>
<i>köç-</i> 「移住する」 (<i>kuç kardan</i>) [303r15]	<i>köç-</i>
<i>kör-</i> 「見る」 (<i>didan</i>) [303v22]	<i>gör-</i>
<i>körük</i> 「鍛冶屋のふいご」 (<i>dam-e haddâdi</i>) [305v21]	<i>körük</i>
<i>kül-</i> 「笑う」 (<i>xandidan</i>) [308r17]	<i>gül-</i>

C. 語源的な長母音に後続する子音の有声化

語源的な長母音に後続して元の無声子音が有声化するのとはアゼルバイジャン語の特徴であるが, 『サングラーフ』の発音に関する注記にも同じ変化の反映と見られるものがある。

küj 「力」 (*zur*) [303v10] (< **kūč*)

すぐ次の項目 *köç* 「移住」 (*naql o hârakat*) [303v11] に「ペルシア語の *jīm* (= *ç*) で」 (*bâ jim-e 'ajami*) という注記があることから, *küj* の語末子音はこれと異なる有声子音 *j* が意図されていると考えられる³¹. cf. Az. *güc*; Tr. *güç*, Uz. *kuch*, Uyg. *küč*.

gejä 「夜」 (*šab*) [312v8] (< **käčä* ?)

「ペルシア語の *kāf* とアラビア語の *jīm* (= *j*) で」 (*bâ kâf-e 'ajami va jim-e 'arabi*) という注記がある. cf. Az. *gecə*; Tr. *gece*, Uz. *kecha*, Uyg. *kečä*.

³⁰ トルコ語の正書法の場合とは異なり, アゼルバイジャン語 *g* は前後の母音に関わらず常に硬口蓋音 (あるいは口蓋化した軟口蓋音) を表わす。

³¹ cf. 'It is hard to see why our author spelt some words out in full and others not at all, but when he spells a word out in part it is usually to call attention to an 'acami letter or to supply a vowel not indicated by a vowel letter. Sometimes it is used simply to call attention to the difference in the pronunciation of two consecutive words. The indication of 'acami letters is so consistent as to create a presumption that ambiguous letters not described as 'acami are 'arabi.' (Sang.:24)

gög 「青草，草地；青色；空」(*sabze o ulang; rang-e kabud; âsmân*) [307v19] (< **kōk*)

「両方ともペルシア語の *kāf*(= *g*)で」(*bâ har do kâf-e 'ajami*)という注記により、語頭・語末の子音が *g* であることが示されている。アゼルバイジャン語では語末の *-g* は *-y* に変化している。cf. Az. *göy*; Tr. *gök*, Uz. *ko'k*, Uyg. *kök*.

一方次の例では、*q* の有声化³²がヴァリエントとして綴り字にも反映している。

ağ / aq 「白い」(*sefid*) [43v12/45r21]³³ (< **āq*)

cf. Az. *ağ*; Tr. *ak*, Uz. *oq*, Uyg. *aq*.

ağar- / aqar- 「白くなる」(*sefid šodan*) [42r22/45r20] (< **āqar-*)

cf. Az. *ağar-*; Tr. *ağar-*, Uz. *oqar-*, Uyg. *aqar-*.

チャガタイ語において語末の子音 *-q* と *-ğ* との対立が中和される傾向にあることはよく知られているが³⁴，語末ではない *ağar- / aqar-* の並行例が存在することから，これらは語源的な長母音に後続する子音の有声化の例と考えるのがより適切である³⁵。また *ağar*-および複合語 *ağ öy* 「フェルトで覆われたテント」

(*alačuq*) [43v20]，*ağ süñäk* 「チュルクの間で知られる遊びの一種」(*yek now' bāzi ke dar miyān-e atrāk ma'mul ast*) [44r4] の項目には，用例としてナヴァーイー作品からの引用があげられているが，それらの作品の手元のテキスト・エディションの対応箇所では当該の語はいずれも子音 *q* をもつ形で現れているため，*ğ* をもつヴァリエントは『サングラーフ』に特徴的なものと言うことができる

³⁶。

『サングラーフ』に見られる上記のアゼルバイジャン語的音韻特徴が，チャガタイ語テキストの読音として，編者マフディー・ハーンの周辺でどの程度の広がりをもっていたかは現段階ではわからず，今後他の資料による検証が必要である。仮にこのような読み方が18世紀の当該地域において一般的であったとすれば，これは古典チャガタイ語作品が地域的な「読書音」によって読まれていたことを示す例として重要であり，前節で取り上げたトルコにおける状況を考えるうえでも，ひとつの手掛かりを提供するものとなるだろう。

4.

いわゆる「チャガタイ語・チャガタイ文学」に関しては，それが地理的に広

³² 摩擦音化を伴ったと考えられる。

³³ この語を前部要素とする複合語もそのほとんどが *ağ / aq* それぞれによる2種類のヴァリエントであげられている。

³⁴ Eckmann (1966:49-50), Boeschoten and Vandamme (1998:169)などを参照。

³⁵ *ağ* の項にのみ「網」(*dām o šabāk*) [43v12] (cf. EDPT 75r a:ğ 'net') の意味も記されていることもこの解釈を裏付ける。

³⁶ *ğ* をもつ項目の方に用例を載せているのは，文字の配列順において *ğ* が *q* に先行することから来ている可能性がある。

い範囲に普及したことが強調されてきた反面、各地におけるその受容の実態についてはこれまで議論されることが少なかった。本稿で取り上げた「読音」の事例が、受容という側面の解明が今後すすめられる契機となることを期待したい。

参考文献

- EDPT: Clauson, Sir Gerard. *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford: Clarendon Press 1972.
- Sang.: Sanglax. *A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān*. Facsimile text with an introduction and indices by Sir Gerard Clauson. London: Luzac and Company 1960.
- Ayazlı, Özlem and Mehmet Ölmez (2011) Eski Uygurca metinlerin transkripsiyonunda kullanılan yöntemler ve işaretler. In: Mehmet Ölmez and Fikret Yıldırım (eds.) *Orta Asya'dan Anadolu'ya Alfabeler*. 29-30 Mayıs 2007, *Eskişehir. Bildiriler*. 43-83. İstanbul: Eren.
- Bodrogligeti, Andras J. E. (1993) Chaghatay or Classical Uzbek? The Uzbeks to take charge of the Classical Central Asian Turkish heritage. *Türk Dilleri Araştırmaları* 3, 43-56.
- Boeschoten, Hendrik and Marc Vandamme (1998) Chaghatay. In: Lars Johanson and Éva Á. Csató (eds.), *The Turkic Languages*, 166-178. London - New York: Routledge.
- Eckmann, János (1959) Das Tschaghataische. In: Jean Deny et al. (eds.), *Philologiae Turcicae Fundamenta* I, 138-160. Wiesbaden: Aquis Mattiacis.
- Eckmann, János (1966) *Chaghatay Manual*. The Hague: Mouton.
- 久保一之 (2008) 「ナヴァーイー (ミール・アリーシール) の社会観—*Maḥbūb al-qulūb* 第1章日本語訳 (付. ローマ字転写校訂テキスト) —」『京都大学文学部研究紀要』47, 183-295.
- Kuru, Selim S. (2013) The literature of Rum. The making of a literary tradition (1450-1600). In: Suraiya N. Faroqhi and Kate Fleet (eds.) *Cambridge History of Turkey* 2. *The Ottoman Empire as a World Power, 1453-1603*, 548-592. Cambridge: Cambridge University Press.
- 菅原睦 (2003) 「『サングラーフ』における幽霊語について」『西南アジア研究』59, 23-38.
- 菅原睦 (2011) (書評・紹介) 「ナヴァーイー作品の3種の翻訳について」『イスラム世界』77, 67-77.
- Mehmet Sadık, *Üss-i Lisân-ı Türkî*. hazırlayan: Recep Toparlı - Ali Ilgın. Ankara: Türk Dil Kurumu 2006.